

毛羽取機(けばとりき)

飯能市立博物館 学芸職員 波田 尚大

今月ご紹介するのは毛羽取機です(画像 1)。養蚕によって育てた繭の表面についている毛羽と呼ばれる余分な糸やごみなどを取り除くために使用しました。木製の箱状の部分に繭を入れ、片手で徐々に流し



画像 1 毛羽取機

ていきます。ハンドルをまわすとベルトもまわり、それに引き込まれる形で毛羽が取れていきます。毛羽のとれた繭はプレート側に箱等を用意し、回収します。とれた毛羽は、本機の下に溜まっていきます。

当館で所蔵している毛羽取機は全部で 10 台あり、生産地や製造会社が不明なものも 3 点ありますが、内 6 台は関東甲信越で製作されています。しかし、本機は現在の兵庫県姫路市で営業していた「河部農具製作所」で製作されました。展示中の毛羽取機のプレートには「義士号」とあり、武人が描かれていますが、これはいわゆる忠臣蔵の赤穂浪士を描いたものです。河部農具製作所は雑誌『現代農業』の、昭和 11(1936)年 3 月 1 日発行号に広告を掲載しており、本機も紹介されています。その広告には、帝国発明協会地方表彰において優等賞を獲得していること、一枚ベルトであることが特徴だと紹介され、作業の能率がとてもよいことが宣伝されています。金額の記載こそありませんが、墨書によると、本機は同年の 6 月に旧原市場村内の 3 家が共同で購入したものであり、当時の最新モデルであったことも踏まえると、高価な品であったと考えられま



画像 2 毛羽取機を使用

す。

画像 2 は、中藤下郷で撮影された毛羽取機を使用している最中の写真です。使用しているのは現在の東京都台東区で営業していた「笠井兄弟商店」で製作された「末広型日の丸号」で、義士号と仕組みは同じようです。詳細な撮影年代は不明ですが、奥の男性が昭和 22(1947)年生とのことで、昭和 40(1965)年ころに撮影されたと考えられます。奥の男性がハンドルをまわし、手前の男性と共に片手で繭を流しています。女性は、毛羽取が終わった繭を移動させています。左手の筵の上には、毛羽取りが済んだ繭が置かれています。

市域では、西川材とともに織物も名産の一つであり、それを支える養蚕も盛んにおこなわれていました。本機は、そのことを現在・未来に伝える重要な資料だと言えます(民具 No.5227)。

【参考文献】

大日本農機具協会『現代農業』昭和 11(1936)年 3 月 1 日発行号

「毛羽取器」日本民具学会編集『日本民具辞典』株式会社ぎょうせい 平成 9(1997)年 5 月 30 日